



タイトル Title	家本秀太郎先生 : 人と学問 (家本秀太郎博士記念号)(Professor Hidetaro Iyemoto : His Personality and Work (Iyemoto Commemorative Issue))
著者 Author(s)	豊田, 利久
掲載誌・巻号・ページ Citation	国民経済雑誌,124(5):103-120
刊行日 Issue date	1971-11
資源タイプ Resource Type	Departmental Bulletin Paper / 紀要論文
版区分 Resource Version	publisher
権利 Rights	
DOI	
JaLDOI	10.24546/00171468
URL	http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/00171468

家本秀太郎先生一人と学問

豊 田 利 久

I

「二つの大病ののちに訪れたこのたびの脊髄炎による上下肢マヒ。一時は、私たち一家も大学の同僚後輩も、遂に来るものが来たと思った。私はいつの場合にも、『病に勝つ』との信念と確信を離さない。『何くソッ』と満身の精神力を傾けて病を克服し、病に勝たねばおかない心を忘れない。……ひとたび自分が生涯を終えざるをえないような大病に見舞われたときには、『生きる喜び』と苦しみの裡に生涯を確かに客観的にもっているこの人生というものに無限の愛着と執着を感じ、自分の心の向け方如何によって左右しうる限りの力を絞って、一日でも長く生き延びようと燃える……」。

家本先生について語るには、まず、御退官前の大病とそれを見事に克服されたいきさつから始めることが、先生のイメージを鮮明に我々に想起させる手だてとなるであろう。冒頭に引用させて頂いた文章は、先生自ら神戸大学医学部整形外科発行の「整形季報」第16号（昭和45年12月）に特別寄稿された「兵庫県リハビリテーションセンターを退院して」の一節である。昭和43年頃から全国を襲った学園紛争の波は神戸大学でも大きなうねりとなって現われ、昭和42年度から大学評議員としての重責を果たされていた家本先生は、他の諸教授とともに、連日の団体交渉という名のつるし上げの矢面に立たされた。日頃から学生運動にも温情を注がれてきた先生にとって、この時ほど身心ともに辛い思いをされたことはなかったようである。そのとき筆者は滞米中であったが、先生から頂いた多くのお便りの中で、弱音が綴られていたのはそのとき一度限り

だったことを記憶している。昭和44年6月、遂に胆のうを切除するという重病に倒れ、約三週間後には上下肢マヒ、これの処置としての脊髄腫瘍の切除、三ヶ月間の困難な理学療法という一連の病との闘いが、神戸大学付属病院等で行なわれたのである。昭和44年11月には、ほとんどお身体を動かさせえない状態のまま、兵庫県リハビリテーション病院に寝台車に乗って入院された。そこでは、我々凡人の想像を絶するような、それこそ死に物狂いの七か月間の闘病が主治医とセラピストの方々の適切な療法の下に行なわれた甲斐が実り、誰の目から見ても奇跡的な回復を仕遂げられたのである。前記「整形季報」の中で筆者紹介の労をわざわざとられた神戸大学医学部柏木大治教授のメモが、その間の事情を何より強く物語っている。

「先生を教室にお引受けした時、実際のところ、私にはこの完全麻痺の下肢をせめて松葉杖でも歩けるようにしてあげる自信は全くなかった。そして毎日、仏様のような先生のお顔を見る事がどれだけ辛かったか。医学の無力である事をいや程思い知らされる日々でした。幸い手術の経過も順調に進み、新設のリハビリテーションセンターに移られてからはひたむきな執念ともいうべき先生の気力と大学復帰への情熱は、センターに勤める全ての人々の心を動かし、本年4月にはステッキ一本で歩けるまでに回復され、遂に目的の大学での講義が出来るまでになられた。……ここまでなられたのは、決して私達の施した医療のためではない。我々微力な医者は、患者さんの病気を癒したなどと考えるのは全くおこがましい。医療はその一部分を手だすけするに過ぎない事を心に銘じ、謙虚であるべき事を痛感する……」。

責任感と情熱を強くもっておられる家本先生は、驚くべき回復をされたとは云えまだまだ不自由な身を、ある時は車椅子に、ある時は杖に支えられて、昭和45年度の講義とゼミナールを再開され、無事それらを完遂されたのである。そしてこれが、神戸大学における御停年前の最後の年であった。

初めから御病気のことばかりを書き綴ることは、礼を失することになるかも知れない。しかし、家本先生について語るにはこの無礼を避けることはできな

いと思われる。実は、上記の一年余にわたる大病との闘いは、先生にとって三度目の御経験である。最初は昭和8年から18年までの足かけ11年間に及ぶ肺・肋膜に関する断続的な病氣、二度目は昭和37年秋の強度な肝炎である。いずれも、文字通り「死線をさまよう」というような大病であった。このような大病とそれらの克服という御経験が、先生のお人柄を形成した大きな要因と思われてならない。それは、苦勞を何一つ知らず順風満帆に人生を送りえた人の人柄でも、人生の苦勞に打ちひしがれた人の人柄でもない。一方において、三たびの大病とそれをめぐる辛苦とを克服された自信に基づく強烈な御性格、他方において、日々病氣やその他の辛苦で悩んでいる自他への深いいたわりから来る繊細な御性格、この相反するような二つの性向を先生はもっておられる。仮りにこれらは、『豪放と繊細』という二律排反的な言葉で表わされるかも知れない。

II

『豪放と繊細』という相反するような要素から成る先生の御性格は、ある時は我々をユーモラスな雰圍氣に誘い、ある時は我々を惑わせてきた。以下、いくつかのこれらの思い出を点描してみよう。

先生はよく、「最近の六甲台の教官スタッフは利口な方ばかりで馬鹿なことをしない」と言われた。これは強烈な皮肉とも受取れるが、率直に解して、いわゆる『六甲台三奇人』に代表されるようなエピソードの多い名物教授が居なくなったことを淋しく思って述べられたのであろう。これは、家本先生自身がエピソードの多い方だから、よく納得できることである。

経済統計学や経済計測学の講義における脱線ぶりは有名であった。その日のトピックが先ず述べられるが、喩え話が脱線に脱線と呼んで学生が喜んでいる間に、最後の数分でトピックの要約がいつの間になされている、というのがつねであった。ともすれば無味乾燥になり勝ちなこれらのコースで、先生が長年の御経験に基づいて案出された講義法なのかも知れない。学生にとってはどこからどこまでが脱線の部分か見当がつかず、講義のノート取りには泣かされ

たものである。ある年、学生自治会が経済統計学について、多くの応募ノートの中からベストのものを選んでノート・プリントを作製したところ、それを一読した先生は「自分の講義した要点は全然書かれていない」と激怒され、爾後自ら講義要録を印刷して配布された。経済統計学や経済計測学の授業で学生が戸惑ったもう一つのことは、先生が、これらの学問の内容や意義の紹介にもましてそれらの欠点や限界を強い口調で述べられた点である。聴講している学生の中には、あたかも自分が叱られているかの如き錯覚に陥り、毎時間頭を垂れて出席した者もあると聞く。

旧制19回生から始まって、家本先生に公私にわたる面倒をみてきて頂いたゼミナール生の数は、御退官時には 350名を越えた。その家本ゼミ出身者にとっでは、研究発表のときに手きびしい先生の攻撃を防御できずに立往生したことや、卒業論文予定要旨を数回提出せねばならなかったことなど、今となっては懐かしい思い出である。ゼミナール生一人々々については、学問上だけでなく就職その他の生活上の問題までを心配され、全く慈父のように接しられた。卒業生各自についての性格やエピソード（通常は失敗話）をよく覚えておられ、卒業後お会いする毎に赤面させられる者も多いのである。人の性格の痛いところをずばりと見抜くという特技は、繊細な方の先生の一面である。

講義やゼミナールも大学院ともなれば一変する。それは、将来学問を専門とする者に必要な『厳しさ』を身につけるには十分に適切な場であった。口角泡を飛ばして学生の研究発表を批評される時の先生は、大病を何度もされたとは思えない別人のように、相手をKOしてもなおパンチの手を止めないボクサーのように、学生への容赦のない攻撃をされたのである。学生は当初非常に戸惑い、ある時は人間関係の悪化にまで進んだ者も多いが、次第に先生が我が身を犠牲にして我々を指導して下さっていることが分かるにつれて、又先生の攻撃をかわず方法を体得するに及んで、大学院家本ゼミナールの学生は成長して行ったと云えよう。もっとも、御退官が近づくにつれて大学院生に対する先生の態度は軟化して行ったようである。ある時は修羅場でもあった大学院家本ゼミ

ナールからは、現在の理論・計量経済学会の第一線で活躍されている幾多の俊材、例えば、村田安雄・金子敬生・安井修二・上河泰男・二木雄策氏等が輩出している。

先に、家本先生は学部ゼミ出身者の特質をいつまでもよく記憶されている旨を書いたが、他方において、先生自ら「健忘症」といわれる程によく物事を忘れられる。面会や会合のアポイントメントはもとより、自分の持物の置場所もよく忘れられた。帰宅して初めて鞆を学校に置き忘れたことに気付き、一日に何度も自宅と学校を電車で往復されたこともある。又、電車の中で傘をさして本を読んでおられる先生を目撃した者もある。これらは、先生のユーモラスな豪放さの一面である。

芸術家肌の家本先生の趣味は多岐にわたる。芸術一般に広く興味をお持ちであるが、特に音楽へのそれは格別である。学生時代から、グリークラブ員として又チェロ奏者として、自ら音楽創造への喜びを嗜まれてきた。校内や道を歩きながらチェロ演奏の手ぶりをしている先生のお姿を散見したこともある。他方、機会ある毎に世界的な音楽家や楽団の演奏を生で聞くことが、先生にとっては最大の楽しみである。先生が感銘を受けた演奏会のあった翌日の授業では、前日の余韻なおさめやらず、経済学から音楽の講義へと切り換えられることもあった。音楽への限らない愛着は、先生をして永く神戸大学交響楽団・グリークラブ・マンドリンクラブの顧問として、これらクラブ活動の育成に寄与せしめたのである。先生の美しい揮毫ぶりも有名である。黒板にさらさらと書かれたあの美しい文字を、先生の講義を受けた者はいつまでも忘れることができないであろう。ペン字も美しいが、毛筆文字によって先生の真価は発揮される。先生のように、英文の手紙を毛筆で書いて外国に送る人は先ず無いであろう。前記リハビリテーション病院での憂さ晴らしに始められた色鉛筆画・ペン画は、退院されてからは凝った水彩画へと発展し、すでに玄人はだしになっておられる。私も、約10冊に及ぶ先生の画帖を見せて頂いたことがあるが、とりわけ、浮世絵風の美人画に漂うお色気は天下一品であった。又、実際の浮世絵等の蒐集も

されている。写真撮影の趣味も相当なものである。芸ごとには謙遜される先生であるが、ことアマチュア写真に関する限り、同僚や門下生には絶対引けをとらないという強い信念をもっておられる。これこそはと思われる傑作写真を先生にお見せしても、先ず誉められることはない。又、昔はしばしば新開地の松竹座や道頓堀の角座に歩を運ばれたという寄席（特に万才）ファンだけあって、つねに同僚や学生を煙に巻いたり笑わせたりしてこられた。誰も憎むことのできない先生の天真爛漫な御性格は、このような幅広い御趣味による所も多いと思われる。

III

家本先生の学界における御貢献と御活躍は、数多くの論文発表・学界における行政的な仕事・研究者の養成、の三点において著しいものがある。多くの優れた経済学者をその門下から輩出したことはすでに述べた。先生は、理論・計量経済学会、日本統計学会、金融学会に属されている。特に、昭和30年から44年まで日本計量経済学会の理事として、又昭和30年から45年まで日本統計学会の評議員（昭和42年から45年までは同時に理事）として、これらの学会の育成に寄与されてきた。今でこそエコノメトリックス（経済計測学）は広く受容されているが、まだまだ輸入された経済理論の一人歩きだけが大手を振っていた当初の経済学界において、いち早くエコノメトリックスを手がけ、それを日本の土壌に植えつけてこられた。実際、先生は日本にエコノメトリックスを導入された先見の明のある経済学者の一人といえることができよう。そしてこれを可能ならしめたのが、先生が若い時に邂逅し教えを受けた幾人かの優れた数学者及び経済学者なのである。とりわけ、園正造・丸谷喜市・坂本弥三郎・水谷一雄・柴田銀次郎諸教授の影響が大きかったと聞く。水谷博士には昭和10年頃から、園博士には昭和15年頃から、経済学・数学・統計学の指導を受けておられる。この間の事情は、先生の博士論文「経済における統計利用の仕方について」(昭和28年)の「はしがき」に次のように述べられている。「稿を終えるに

当って思うことは、ゼミナール恩師丸谷喜市先生から受けた厚き真摯な学問的態度と、経済学・数学・統計学のこれなしには成立たなかった園正造博士の温情に満ちた激しき叱咤と、水谷一雄先生の当初から今日までの絶えざる御指導への感謝である。坂本弥三郎先生が私を生かそうとして指導し推挽し激励して下さったこと、柴田銀次郎先生が在学中から我が子のように手を取って経済統計学の御指導を賜ったこと、そしてこれら五人の先生方が私の病中その他の生活面にまで心をくわいて下さった恩義を永く忘れることができない……」と。

家本先生の学問上の業績の主なもの大別すれば、(1)家計費の分析 (2) Douglas 生産関数の計測 (3)産業連関論 (4)国民経済計算論 (5)その他、に分類することができる。以下これらを順次回顧することにより、先生の業績とその学風を知るよすがとしよう。

IV

家本先生の計測経済学的研究において先ず挙げなければならぬのは、家計費の分析とその応用である。先生は、生活水準ないし消費水準の向上を国民経済の究極目標の重要なものの一つに数え、つねにこれらを自らの経済学の支柱に据えようとされてきた。家計費の分析も、これら生活水準ないし消費水準の変化を計測するための基本的な研究テーマとして取り上げられたのである。

各家計費目（飲食費・光熱費・住居費・被服費・社会文化費等）の家計における重要性指標の研究が家計費分析の出発点である。有名な Allen & Bowley, *Family Expenditure* (1935) に示されたように、支出弾性値が1より小なる費目を必需費目、1より大なるものを贅沢費目と定義するのが通常の仕方である。先生も「家計調査よりみたる給料生活者及び労働者の生活様式」(昭和16年)において、支出弾性の逆数の形でではあるが同様の方法を適用された。しかし、光熱費が飲食費よりも遙かに必需性を示すという生活実感に反する結果をえ、この様な欠点を除くところの家計における重要性を示す指標を追求し、エンゲル法則の一般化に到達されたのである。すなわち、「家計調査よりみたる給料生

活者及び労働者の生活様式(統一)」(昭和24年)や“On the Generalization of Engel's Law”(昭和30年)においては次のことが示された。いま実収入を α 、第 i 番目の家計費目を E_i とし、生活緊要度としての指標を $\mu_i = \partial(E_i/\alpha)/\partial\alpha$ と定義する。 μ_i が負の時を必需的(E_i が飲食費ならばエンゲル法則のケース)、正の時を贅沢的と定義して実証した結果、飲食費・住居費・光熱費の必需性の順序、被服費・社会文化費の贅沢性の順序はもとより、飲食費が群を抜いて必需的だという生活実感に合致する結果がえられた。この研究においては各家計費目支出を実支出ではなく実収入の関数と考えたこと、各所得階層における所属世帯数をウェイトとした加重回帰線を求めたことなど、Allen & Bowley やその追随者の研究を遙かに凌ぐものであった。

家計費の分析に関連する家本先生の第二の貢献は、最低生活費の計測をめぐる研究とその国民経済上の意味づけである。先生は、最低生活費の内容をできるだけ客観的・科学的に把握するために実物量として取り扱う方式(物量方式)を基本的にとりつつ、物量方式を許さない費目について二・三の策定方式を示された。まず、「最低生活費とエンゲル法則」(昭和25年)においては、エンゲル係数と実収入との間の関数関係を示すエンゲル係数曲線の性質に着目して、曲線の逓減部分のうちエンゲル法則が本来示すべき漸近的逓減部分に転換せんとする変曲点に対応する実収入を以て最低生活費と定義された。「最低賃銀の算定」(昭和28年)においては、一般に行なわれている飲食物量方式、すなわち、飲食費についてのみ物量方式を施し他の費用は都市平均エンゲル係数で最低飲食費を割算した商として求める方式の難点が示された。すなわち、えられた最低生活費に対応する現実のエンゲル係数と上の都市平均エンゲル係数との間には、乖離が生じるのが普通である。そして、この矛盾を回避するような一策定方式が示された。さらに、「家計支出行動と最低生活費」(昭和34年)においては、飲食物量方式をとらないで、所得階層別家計支出調査の利用によって、できるだけ消費者行動の実態をとり入れる努力がなされた。すなわち、クロス・セクション資料でみた場合、物量測定可能費目の支出金額の全生活費に対する割合

は可処分所得の上昇とともに次第にゆるやかに減少すること、物量測定不能費目の支出金額の全生活費に占める割合は所得上昇とともに次第にゆるやかに増加することが分かる。したがって、家計均衡点として、前者の単位所得当り減少分が後者の単位所得当り増加分に等しい点を考え、その点における可処分所得を以て標準最低生活費と定義された。ここに注目すべきは、先に言及した『生活緊要度』の定義に基づく必需品と贅沢品の中立点として家計均衡点が考えられていることであり、ここに家計費分析における先生の一貫したアプローチを見ることができる。

V

家本先生がエコノメトリックスを日本に定着させた草分けの一人であることは、すでに述べた。それを証明する代表的な論文は、日本の生産関数計測上で不朽のものとされている「ダグラス生産関数を育成する立場から」(昭和26年)である。先生がこの論文で果たされた最大の貢献は、Douglas 生産関数では欠除している原材料をどのように解釈するかという点であった。一般に、粗生産物は資本・労働力・原料を用いて生産される。したがって、Douglas 生産関数を適用する場合には、粗生産物と原料との間の一定の物理的関係の吟味が必要となる。日本綿業への適用を企てられた先生は、粗生産物である綿糸と原料である原綿・電力との間の物理的関係の吟味に進み、原綿および電力使用量を綿糸一梱当りにつき求めた場合、各年度別数値はほぼ一定であることを認めることができた。この fact-finding に基づき、Douglas 関数が日本綿業に適用可能なることが示された。すなわち、粗生産物と原料との間に一定の物理的関係が経験的に確認されるならば、利潤極大の条件から、粗生産物は投下資本量・労働量のみ関数として表わされる。そして Douglas 生産関数を介して、資本と労働の弾力性がそれぞれ資本と労働の relative share に等しいことが示される。先生の計測は、Douglas 関数による relative share の決定と原価計算によるその実績とが、特に戦前について極めて近似しているという結果をもたらした。

なお、先生のこの貢献は、Douglas 生産関数の創始者である Paul H. Douglas その人とその共同研究者であった Martin Bronfenbrenner 両博士から、昭和25年に絶賛の言葉が送られることによっても評価された。

VI

現在では数理経済学偏重が反省されかけようとしている日本の経済学界であるが、昭和の初めに一般均衡理論を中心とする数理経済学に正面から取り組んだ人は数少ない。昭和8年の旧神戸商大卒業論文ですでに V. Pareto, *Manuel d'Economie Politique* (1926) を紹介された家本先生は、学究生活を始められた頃に若干の一般均衡理論に関する論文を発表された。例えば、「一般均衡理論の統一的理解に就て」(昭和11年)においては、効用関数と生産関数との類同性を契機として、生産を以て自然と人間との交換行為とみなすことにより、ワルラス体系における生産の一般均衡理論は、形式的には交換の一般均衡理論と同等であることが示された。又、「利子を含む一般均衡理論」(昭和12年)においては、生産期間をあたかも一つの生産要素の如く生産関数の中にも含めることによって、利子が他の生産要素と同じくその生産力による限界原理によって説明されることを示し、複線回帰的生产構造の下における一般均衡の成立を示されている。

先生が水谷博士の御好意によって、初めて W. W. Leontief, *The Structure of American Economy, 1919-1929* (1941) に接したのは昭和17年であった。早くからこの Leontief の業績に注目されていたのであるが、実際に Leontief の産業連関論とその拡充に関する諸論文を発表されたのは昭和27年以降であり、山田勇教授と本書の翻訳書を出されたのは昭和34年である。申すまでもなく、Leontief の産業連関論は Walras の生産方程式をその理論的背景にしているが、すでに述べたように、一方では一般均衡理論を、他方では経済計測学を研究されていた先生にとって、産業部門間の相互依存関係を計測せんとする産業連関論が非常に興味のある恰好のテーマであったことは容易に肯ける。

先生は産業連関論をめぐる諸論文において、産業連関論そのものの意義を高

く評価する反面、それがもつ理論上・計測上の諸問題点を鋭く指摘しながら、それらを解決する方策を探っておられる。一連の論文、「産業相互関連の input-output 的分析について」(昭和29年)、「レオンチェフ分析における二三の問題点」(昭和30年)、「産業連関論としての Leontief 分析の特徴と困難」(昭和36年)、「産業連関論における問題点」(昭和39年)においてそれらが解説されており、又これらを通読すれば、産業連関論が最も深く研究されたほぼ10年間の成果と限界を知ることができる。

産業連関論に関する積極的分析は、(A)「物量基準の産業連関波及と金額基準の産業連関波及」(昭和34年)、(B)「産業連関論における前向き分析」(昭和34年)、(C)「最終需要の所得効果と生産力効果を計測する演算可能な静学モデル」(昭和36年)においてなされた。論文(A)においては、金額基準の産業連関表から求められる金額的な波及効果が、物的基準の産業連関表から求められる物量的波及効果と、どのような隔たりをもつかが究明された。先ずそれぞれの波及効果が定式化され、両効果が合致するための条件として、物価変動の部門間比例性という条件が導かれた。そして、日本経済についてこのような比例性が見出されないことを実証して、実際の統計資料からえられる金額的波及効果の困難を示された。なお、これと同じ内容の論文“Repercussion Effects in Physical Terms and in Value Terms”は昭和34年12月の Washington D. C. における Econometric Society 大会で発表された。論文(B)においては、過去の産業連関表をもとにして観察年度における産業連関波及効果(金額的)を推定するという問題が、次のような二つのアプローチによって試みられた。第一は、連関表作成年度と観察年度との間に物価変動のみ存在して物量的投入係数が不変の場合、両年度の産業別物価指数と観察年度の最終需要額を用いて各部門の金額的波及効果を定式化すること。第二は、特定部門の物量的投入係数のみ変化して物価変動がない場合、その部門の物量的投入係数の変化量を用いて各部門の金額的波及効果の変化を定式化すること。論文(C)においては、所得効果ないし有効需要効果のみ従来は着目されていた最終需要の波及効果について、

他の面である生産力効果をも同時に含むような国民経済の一般均衡モデルが示された。この論文で最も注目すべき点は、内生変数として定義された各部門の消費と投資の取扱いであろう。前者については、各部門の消費が可処分所得と歴史的時間の関数として与えられ、後者については、一定の部門間産出量資本係数を導入することによって、各部門の投資が各部門の産出総量と資本ストック既知量から与えられた。最終需要の内生化という点で、この論文は狭い意味での産業連関論の枠をはみ出しており、先生の次の研究テーマとなった国民経済計算論への橋渡しとなっている。

VII

周知のように、産業連関分析は産業部門間の直接・間接の波及効果の計測を可能とし、中間生産物の流れを明示的に取り扱うことができる。この意味では、通常の所得分析の射程外にあるヨリ部門分割された経済活動を一般均衡論的に分析できる。しかし産業連関分析だけでは、経済活動の諸形態（生産・消費・蓄積等）の総合的な把握も、貨幣的取引の分析も不可能である。前者は国民所得表によって、後者はマネーフロー表によって、一般均衡論的ないしは会計的に把握することができる。家本先生の最近の研究課題も、このような点を反映してシフトしている。それは、国民所得表・産業連関表・マネーフロー表を柱として、さらに財政収支表・国際収支表・国民貸借対照表等を加えた国民経済勘定体系、すなわち国民経済計算論の研究である。

先生の国民経済計算論へのアプローチには、Cambridge 大学の Richard Stone 博士の影響が強く入っている。国民所得の循環をもととした計量経済モデルの樹立を目指す Stone の構想は、R. Stone and G. Croft-Murray, *Social Accounting and Economic Models* (1953) によく表われているが、先生は渋谷行雄教授と共に本書を訳出された。この本の中の Stone の業績のうちでも、とりわけ、国民所得表と産業連関表をうまく結合した社会会計マトリックスの提示と、一定の消費水準を目的とするようなモデル建設への態度は、まさに先生が志向して

おられたものと云えよう。社会会計マトリックスは、産業部門間取引をもその一部として含みながら、経済活動の諸形態を表示するものである。一定の消費水準を目的とするようなモデルは、Stone の有名な線型支出体系による消費水準の決定として示されたが、他方、家本先生も年来、消費水準の向上を経済学の究極目標としてこられたことは既述の通りである。

Stone の構想がヨリ具体的な統一モデルとして発表されたのが、Cambridge Growth Project から出ている *A Programme For Growth* というシリーズの第1—3分冊（1962—63年刊）である。ここでは、将来における一定の消費水準とその上昇率を確保するための資本蓄積の問題が、計測可能な動的計画のモデルとして示されている。最終需要各項目は計測可能な個別経験関数として取り入れられ、モデルの諸仮定は各時点で可変的であることなど、多くの工夫がなされている。家本先生は、たびたびこの Stone 達のモデルを紹介されたが、「Richard Stone のイギリス経済成長モデル」(昭和40年)において、次のように書かれている。「消費水準の確保を基底としてこの基礎の上に生産構造やさらに社会資本の充実までも築き上げてゆくという構想は、消費水準についての新しい経済理論の立場として注目すべきものである。社会主義経済理論にみられる生産財優先主義もこの観点からは逆立ちしているわけであり、限界効用理論の如き個人心理に根ざしたアメリカを中心として発展した計測関数論とは異なった立場と云えよう。しかも、今日の先進自由主義国の経済目標が共通に完全雇用の達成と生活水準の向上におかれている点を考慮している点も見逃せない……」。このように、Stone のモデル建設の方法を高く評価しておられる。ここには、先生の経済学に対する考え方が片鱗を見せているが、それについては次節で触れることにしよう。

なお先生は、昭和38年度から二年間、経済企画庁国民経済計算審議会委員として、我が国の国民経済計算体系の整備・拡充のために多大の貢献をされた。

VIII

以上、先生の主要な研究テーマを簡単ながら回顧してきたのであるが、この他にも幾つかの分野で貢献をされている。第一に、統計学ないし経済統計学の分野では、 n 次有理整関数 $y = \sum_{i=1}^n a_i t^i$ の係数 a_1, \dots, a_n を時系列 y を用いてあてはめるための簡便法が示された「累加法に依る新しい有理整函数の当嵌法と其の公式の表式化」(昭和13年)は、特筆すべきものと思われる。第二は、日本の繊維産業に関する統計的分析である。先生は東洋紡績経済研究所と密接な関係を保ちながら、日本経済発展の原動力であった我が国繊維産業の実際の側面に特別の関心を払われてきた。すでに紹介した Douglas 生産関数の計測も、日本綿業について行なわれたものであった。又、一連の論文「線型計画法による最低飲食費問題と繊維競合問題の取扱い」(昭和30年)、「繊維競合の問題」(昭和31年)、“Textile Inter-fibre Competition” (昭和32年)、「繊維競合と日本繊維産業」(昭和33年)においては、天然繊維と人造繊維との競合を中心とする繊維競合の問題が線型計画法の理論骨格において詳しく検討された。一つの混合問題(食飼問題)として問題が定式化されたこと、デュ・ボン社が発表したアメリカ戦前・戦後の繊維消費資料によって線型計画法の理論構成が統計的に検証されたこと、繊維競合の問題が家計や企業に対してのみならず広く国民経済に対して考察されたこと等、繊維産業の現状をふまえながら独創的な検討が展開されている。

以上に列挙してきた以外のものについては、ここに詳しく紹介する余裕を我々はない。しかしながら、先生が折りにふれて示されてきた経済学への根本的な考え方を紹介しておかねばならない。

先生は随所に、ある特定の学派や体系を鋭く批判されることはあったが、先生自身がどの学派や体系に組み入るかということを明確に述べられたことはほとんどない。しかし、そのことは、先生が経済学に対して一貫した考え方や態度をもたれなかったというのでは決してない。それどころか、すでに昭和28年

に書かれた「経済における統計利用の仕方について」の第1章において、先生自身は計測経済学の立場に立ち、その計測経済学は近代経済理論に基づいていること、そして先生自身の計測経済学的方法的特徴は如何なるものであるかを、明確に述べておられる。私の観察では、20年近い歳月が過ぎた今日でも、先生の経済学に対する考え方や方法的特徴はほとんど変化なく一貫しているように思われる。したがって、その第1章の内容を簡単に紹介しながら、若干のコメントを加えることにしよう。

先生は、近代経済理論の特質として次の六つの点を指摘しておられる。(1)一般均衡理論であること (2)巨視的立場と微視的立場の併存せること (3)動態的研究に重点をおくこと (4)計測経済学的であること (5)貨幣経済理論であること (6)歴史的課題への問題意識に欠けること。これは先生の近代経済理論の捉え方を示したものであり、多くの異論もあろうと思われる。しかし、ここではそれには触れない。

ここで注目したいのは、先生自身が計測経済学においてどのような方法的特徴を示されたかということである。先生は第一に、『国民消費生活からの経済の観察』を挙げられている。このことは、すでに我々も先生の業績を回顧しながら指摘してきた。一定の生活水準ないしは消費水準を満たすための、国民経済における消費財の生産を基底とする拡大再生産過程を経済発展の姿とされ、これの基本動因を労働力再生産のための消費財の生産活動におかれている。なお先生は、生活水準ないしは消費水準だけを国民経済の究極目標とされているのでもないし、生活水準と消費水準の間のギャップにも注意を払いながら、生活水準の測定問題をも考えてこられたのである。

第二の特徴として、『巨視的・計測的観察に限ること』を挙げておられる。近代経済理論における価値論は個人心理に基づく主観的なものだとして、一応これを切り離し、巨視的・統計的観察によって資本主義経済の諸動向や計画理論を研究することに重点がおかれている。なお価値論については労働価値説による客観的立場をしばしば高く評価してこられた。

先生は第三の特徴として、『経済における統計利用の客観的態度』を主張される。このことは、現実にあるがままの統計資料から、一連の基本的経験法則をできるだけ単純な統計式として表示しようとするものである。これについては、次のように述べられている。「複合結果たるそして又多くの場合十分な推測統計学的吟味を経ないところの経済統計資料に対して、到底堪うべくもない精緻な数学的経済理論を強制するが如きは甚だ疑問であろう……」と。しかし、通常言われている意味での“measurement without theory”を積極的に主張されているのではない。先生は、分析者の経済認識を計測のための前提とされるのであるが、これについては、「経済学と Fact-Findings」(昭和46年)の中で次のように述べておられる。「我々は一定の経済ビジョンとか経済認識をもち、これに基づいた統計的仮説を立ててこれを検証し、この仮説が統計的に確認されるならば一つの積極的主張として発表することが許される……。現実の現象から逆に基本原理を統計的にさぐり出してゆく場合、しばしば甲の立場からの統計的仮説は乙の立場からのそれと競合し、そのいずれからの接近も仮説妥当の結果を生むことがある。それは仮説そのものの識別という経済分析以前の経済認識の問題に解決の糸口が潜んでいることが少なくなく、この意味においても我々は、統計分析方法という手段以上に経済に対する観察方法ないし洞察力を重視したい」と。

第四の特徴として、『日本経済の特質を織り込むべきこと』を挙げておられる。このことは、実体経済を離れた抽象理論の研究ではなく計測経済学の研究をされようとする先生にとっては、当然のことであったといえよう。第五の、そして最後の特徴として、『産業構造分析を内容とすべきこと』を挙げておられる。これは、すでにみたように、昭和28年当時産業連関論の研究を志向されていた点を考えると納得の行くところであるが、今日ではむしろ、産業構造分析をその一部として含むような国民経済計算体系を会計的図式で把握することに、テーマをシフトされたことはすでに述べた通りである。

このようにみえてくると、先生の計測経済学の立場が特定の学派や理論体系と

結びつく必要のないものであるように見える。それは“empirical economics”の立場とでもいうべきもので、初めから理論的結論に合うように統計資料を扱おうというのではなく、経済認識だけを前提にして統計資料から逆に何らかの法則性を見出そうというものである。しかしながら、理論体系と経済認識とは必然的に何らかの関連をもっているはずであるが、先生の論述ではその点が明確にされていないように思われてならない。経済認識だけを前提にするというとき、一定の経済認識ないし仮設に基づいて推論ないし演繹によって組織的な理論体系を作り、それを統計資料によって帰納的に検証するというプロセスを否定されているのであろうか。又、fact-findingsによってえられる経験的法則性をどのように用いて統一的な理論体系を生成するための基礎とすべきであらうか。未熟の筆者は、このような点について先生の御見解を理解できないままである。

すでに述べたように、先生は、一方において労働力再生産のための消費費用消費財の生産を経済循環の中核とし、他方において客観的なものとして労働価値説を高く評価しておられる。先生の労働力再生産を中核とする経済循環における価値の流れが、どのようにして矛盾なく説明されるのだろうか。労働力再生産を含む先生の経済循環理論が、具体的な形となって完成されることを筆者は切望している。

最後に我々が注目したいのは、先生が経済計測学（エコノメトリックス）の統計的方法の限界をつねに主張されていることである。経済現象へ統計的方法を適用するために開発・拡充された“econometric methods”と呼ばれるこの分野も、経済構造の変動という困難なしかし重要な問題に対して、ほとんどお手上げの状態といえる。先生は、「経済構造変動の定量分析について」（昭和39年）や「経済構造変動の計測について」（昭和42年）等において、この問題を鋭く指摘しながら、経済計測学の限界を強調されている。統計的方法の無反省な適用が横行し、計測作業のみが先行するきらいのある最近の傾向の中で、我々がつねに留意しなければならない点であらう。

IX

先に、家本先生が『豪放と繊細』という二律排反的な面をもっておられることを述べた。これは、先生の外面だけしか知らない人には奇異に感じられるかも知れない。なぜなら、先生は外面的には非常に照れ屋であり、およそ『豪放さ』があるとは容易に察しられないからである。

その照れ屋の先生が奥様の話になると、これ以上照れることはできない程にはにかみながら、最愛の奥様の自慢話をされる。すでに大学生になられた二人の御令息にも囲まれ、愛情に満ちた御家庭を築かれていて幸せ一杯である。我々は、経済学部に残っている次のエピソードを思い出せば十分であろう。毎年の学部卒業式謝恩会場で、宮下忠雄教授が「女性が天使にみえる間は結婚しない方がよい」と晩婚説を、北野熊喜男教授が「天使にみえる間に結婚した方がよい」と早婚説を唱えられて、卒業生を困惑さすのが恒例であった。ところが、いつからか家本先生もこの論争に加わって、「どちらの説も取るに足らず。要は、いつまでも天使のようにみえる人と結婚しなさい」と述べられて、この論争をさらに面白くされたのである。南方寛一教授はこの論争を評して、「皆、自分の体験話をしている」とコメントされた。先生の御家庭がいかに幸福であるかについては、もはや私の蛇足を必要としないであろう。

最後に、御健康に留意されることを特にお願いして、私の責を終えさせて頂きたいと思う。

(付記)

本稿を書くに際しては、神戸大学経済学部の同僚の方々、特に丸谷冷史助手のお世話になりました。